

## 第5回松本市中央図書館あり方検討委員会 議事録

日時：令和2年12月21日（月）13：30～17：30

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

### 【出席者】

伊東委員長、菊地副委員長、森委員、森田委員、吉成委員（テレビ会議で参加）  
（事務局）瀧澤中央図書館長、羽田野館長補佐、町田館長補佐、栗田館長補佐、  
百瀬主査、内山主査、丸山（和）主事

### 1 開会

瀧澤館長：

定刻になりましたので、第5回松本市中央図書館あり方検討委員会を始めたいと思います。

年末のお忙しいなか、お集まりいただき、ありがとうございます。コロナがますます大変な状況になっているため、吉成委員は今回もZOOMでご参加いただいています。

では、伊東委員長、よろしくお願いいたします。

### 2 議題

#### (1) 図書館サービスについて

伊東委員長：

みなさん、よろしくお願いいたします。まず、今日の委員会の全体的な流れを説明したい。

報告書の素々案という形で示していただいております。今までのたたき台に修正を加えながら進めてきて、「5 職員や運営体制に求められるものとは」までを検討してきており、今日は「6 めざすサービスの実現を支える施設と設備とは」の検討になる。これで終わらせるというよりは、次回は完成にしなければならないので、「6 めざすサービスの実現を支える施設と設備とは」について議論し、後半で全体について議論していくくらいの配分でどうかという風に思っている。

また行ったり来たりすると思うが、その辺は事務局で拾い上げていただいて、次の素案に反映してもらえればいいのかと思う。

書いてもらった「6 めざすサービスの実現を支える施設と設備とは」には、施設について少し入れ込んでもらっている。もちろん、まだ委員が議論をしていないので、具体的な話には至っていないが、「6 めざすサービスの実現を支える施設と設備とは」以降に書かれていることについて思うことを出していきたい。

私としては、元々この委員会を設置する動機の一つに改修計画があったということなので、「6 めざすサービスの実現を支える施設と設備とは」を議論の取っ掛かりにしていたところもある。しかし、あり方検討でその辺をどう扱うかで、後々に影響するのも知れないので、どうしたらいいのかとも思っている。施設や設備に関して「あるに越したことはない。新しいに越したことはない」という話に終始してしまうと、途方もない話になっていくので、そこを心配している。

みなさんの良識の範囲内で、お金がいくらあっても足りないような話にならないような状態で議論していただくということになるかと思うが、建築計画ありきの計画ではないという一方で、設備の老朽化に伴う改修は急務になっている。改築計画については、松本市中央図書館についての議論。図書館の施設設備について全体的にどうだという話は、松本市図書館の方でもいいのか

なという気はしている。まず、その辺からどうでしょうか。

**森田委員：**

目指すサービスの実現を支えるにはどういう環境であるべきかというのは、出ている5つの課題に対して、これが全部解消されるような流れが必要はず。

全体に関わる話になるかもしれないが、「目指したい将来像」で書かれていることについても、課題が解決されることが必要。

例えば、課題の1点目に「図書館に来ない市民をどう呼ぶか」とあるが、今の図書館をここに置いて、それをどうしたら解消できるのか。例えば、入口をガラッと変えてしまうとか、おいしいコーヒーが飲めるとかいう何か別の魅力を付け加えるのかとか、そうやって見ていくと、2点目も「図書館サービスの周知」と言っても、図書館について市民が「本を借りる所だよね」ということだけしか見えていない状態において、「もう少しこういうサービスができます。」ということはどうやっていくのか。空間だとか、環境で変えていくのかとか、この5点全部について、その後で解消されているのかどうかというチェックが必要だと思っている。

その辺りは「将来像」や「実現に向けた図書館サービス」でもパラパラと書いてあって、来ない人をどう呼ぶかということには、あまり答えていない。「さまざまな手段を活用して市民に伝えていく」というようなことは書いてあるが、「来ない人をどう呼ぶのか」ということを書くのはここしかないのではないか。

流れとして、課題があって、それに対して、「こういう風に答えていきます」と、いうようなことを書けるのであれば、それがいいと思った。例えば「いっぱいサービスがある」と言っても、洗い出してみないと、図書館がどんなサービスをしているのか一般の方には分からない。あるいは「課題解決に寄与できる」の『課題』って何？」「そんなところまで『課題』で持って行っていいんですか？」というように。

この報告書は目指すべき方向を書くもので、それをどう解決していくかの手段までは書けないのかもしれないが、それでも「例えば、こんな風に解決していく道があるかもしれない」という風に書くと、いいのではないか。

**森委員：**

課題がはっきりと見えたところで、それに対する解決策というのが分かりやすく、「この課題がこういう風に解決されていくんだな」という道筋が見えやすければいいという気がする。

課題の一つ目は、8割が利用していない、その利用していない人たちに「来ない」という表現をしているが、多分、利用する手段として実際に図書館に来る人、図書館に来なくても、移動図書館のように届けてもらったものを自分の近くで受け取って読む人、それから、完全に電子の世界で居ながらにして使う人というような三層構造になると思う。

図書館を利用している2割以外の8割の人に届けるための手段として、今まで来なかった人が来ること、自分の近くに取り寄せるサービスができるのなら、それを使うこと、これから新たに導入していくであろう電子的な資料を使うこと、という三つの解決策がある。そういう風に考えていくと、どの課題に対しても、広報によって従来の図書館を知ってもらい使ってもらい以外に、新たな手段を開発して提供するということがあるはず。

これまで届かなかった人へ届かせるために広報はもちろん大事だが、広報だけではなく、「こういう新たなサービスを提供します」という話があって、サービス提供の最終的な手段として、「本当に中央図書館はここでいいんですか？」「建物はこのままでいいんですか？」という話が

最後に来ると思う。そういうようなことを考えると、もうちょっと書けることはあるのではないか。読んでる人が「あ、自分はこのパターンだな」「このパターンだったら、自分は松本市図書館のユーザーになるな」というように、「自分事」になって落とし込めるものが読者に伝わるのではないか。

**伊東委員長：**

議論の進め方をどうしましょうか。全体のことをもう少し話してからの方がいいですか？

**菊地委員：**

その様子はありますね。

**伊東委員長：**

では、全体のことについて引き続き話をさせていただきたい。

**菊地委員：**

目次について。前回の会議終盤でホワイトボードにピラミッドのようなものを書きながら、「ミッションとビジョンというものがあって、それに対してどうアクションするのか」というような話をしたことが、今回の素々案の構成としての目次に十分反映されていることが理解できた。そこが前回から改善された部分で、すごく良かったという印象を受けた。ありがとうございます。

前回の話と、今の森田委員、森委員の話とも繋がりながらの話になるが、6の『施設』というところは、この見出しにあるとおり、目指すサービスの実現を支えるという風に施設・設備のことを語っているので、「目指すサービスに必要な設備とは何か」ということを考えれば、ここは必然的に書けると思う。

具体的に、どんなテクニカルなことやメカニクなものが必要なのかということは、多分、サービス像の解像度をもう少し上げることで出てくると思う。そういう意味でも、全体の話に戻すということでもいいのではないかという風に思っている。前回ホワイトボードに書いたピラミッドでは、ハード面とソフト面を並列の関係で一番下の層に書いたが、実際のところは、やはり、ソフト。図書館サービスに従事する人、人のサービス、レファレンス機能を含めて現場の人が何ができるのかということ、それを支えるハードは何が必要なのかという論建てになると思う。

これは報告書のページの後ろの方からから、また元に戻っていくような形で、何が目指すサービスなのか、そのサービスを通してどういう課題を解消したいのか。あの書いたピラミッドを逆に下から上に登り直すような作業を今やってみれば、必然的にその一番下を支えるハード面、何が必要か抽出できるのではないかという風に思った。

**吉成委員：**

これからの議論は、多分、各論にいくと思うので、今、頭の中に浮かんでいることをお話ししたい。先日、イタリアのアントネッラ・アンニョリさんたちとオンラインで3時間半くらい話をした。残念ながらアントネッラさん本人と話すことができなかったが、図書館に対してどういう考えを持っているのかということでは、非常に考えさせられることを言われていた。

図書館は、何がこれから強みになるのかというところでは、「イタリアも基本的には本を貸出するとか、貸し借りをするというところがメインになっている図書館は多いです。自分の言っているような図書館ばかりではないということをご承知ください」という前提でお話しされていた。図書館の何がこれからの強みになるかと言えば、『図書館のオープンさ』。これは空間的なもの、

精神的なもの、心理的なものもそうだが、公共施設としての図書館のオープンさと、コモン。「共有的な所」だということ。それは前県立図書館長の平賀さんも言うておられたが、みんなに共通してあった。

図書館を今まで5年やってきていろいろな話をしたが、「図書館は何のためにあるか」と言ったとき、強く受けとめているのは、「図書館に来る人が、話がしたい、受け止めてほしいと望んでいる」ということ。今までは、それは図書館の役割ではないという風に、言われていたことだと思うのだが、そうではないと考えている。

図書館というものは、地べたに近いというか、低いところで認知されている。権威的ではないし、オープンだし、プライバシーはある程度守られるし、という前提の信頼感のなかで元々きているものだと思う。例えば、アントネッラさんがオンライン会議で、DVやホームレスのことを事例として言うていたが、僕が自分のまちで浮かぶのは不登校の子どもたち。

彼女は『図書館は文化的救済病院』という言い方をしていたが、そういう感覚はこれまでの議論のなかで、そんなに出てきていないと思う。この報告書のなかにもない。日本とイタリア、ヨーロッパとはもちろん違うので、「同じようにこういうサービスをしよう」という風には言うつもりはないが、オープンさとコモンさというのは、やはり空間的にも影響を受けるし、一番初めに森田委員が言われたような入りやすさというようなところは、単なるデザイン上の問題だけではなく、その図書館のあり方に関わるぐらい非常に深いコンセプトなのではないかと思う。彼女はそのことを「屋根のある広場」と「屋根のない広場」の二つがくっついているバルバロッサの図書館の話で出したのだが、そこには、僕がこれから進めようとしているメディアコスモスで言うところの『シビックプライドセンター』も3階にあった。

まちのことを考えるという要素を、図書館が入っている同じ複合施設の中にわざと配置して位置づけているということを非常に強く感じたのだが、この報告書を読むと、「本の貸し借りだけではない」という言い方が随所に出てきながらも、そこに「ではどうするか」というものがない印象を受けた。委員会としてそれで本当にいいのかどうかということが、もうひとつピンとこない。委員会の4回目で議論をあまり元に戻すようでもいけないのだが、『オープンさ』というようなところにはこだわりたいという風に思っている。

#### 伊東委員長：

多分、松本の図書館の枠の壁というものを、その人たちは頭の中にしっかり持っているはずなので、今ないものを書くというのは、なかなか大変なこと。今の話を聞いていて、そうでない部分を委員の方から出して、書き加えていかないと、多分、報告書にならないだろうと思えてきた。

吉成委員の今の話は、サービス面でもそうだし、施設面でも当然、全体的に言えること。先のお二人が言われたことにも、「ここに来られない人をどうするか」とか、「地域課題をどうする」というような視点がある。

例えば、地域課題云々と言葉では書いても、具体性は何もないので、そのところをどこまで報告書で出せるのだろうかということを思いながら、今回の案を見ていた。素々案では『場』のことに触れてはあるが、具体的にどういうことを以て『場』と言っているのかというようなことも具体的に示さないと、机上の空論というのか、説得力がないと思う。それを具体的に落とし込めるのか…ということを半分は思いながらも、それやらないと、きっとキツイだろうと、今、思っている。

**森委員：**

今の吉成委員と伊東委員長のお話に絡めて事例をひとつお話したい。

先日、県の子どもの自殺を予防するための担当部署の方が、図書館へ相談に来られた。私も知らなかったが、長野県は子どもの自殺率が全国でも高い方という現状があり、社会、地域のなかで安心、安全な場所で、心理的にもハードルが低く、あちこちにある図書館が、自殺予備軍的な状況になっている子どもたちの受け入れ場所になれないかということだった。

2015年だったか、鎌倉市立図書館のツイッターで、「9月1日、辛い子は図書館にいらっしやい」というツイートがあり、とてもいい反響が多かったと思う。一方で、「勝手なこと言うな」という反発もあったが、「よくぞ言ってくれた」というところはあったと思う。

私も、すごく素敵だな、と思った。しかし、本当にそういう機能を図書館が担えるのかということになると、考えることは多い。吉成委員が言われたように、図書館はオープンな場所、誰でも来ていい場所なので、完全に安全とは言えないケースもありうる。学校は、学校関係者以外は基本的に入れないが、公共図書館は本当に誰でも入っていい場所。そういう所が子どものそういう避難場所に本当になれるのかということ、県の職員の方とも、長時間話し合っ、「小さく、スモールスタートしてみましよう」という話になった。やはり自殺率が高い地域は当然あるので、そういうところから、まず、教育委員会全体で話してみる。図書館に直接話しても、図書館の職員も受け止めきれない。いいことだと思うけど、「本当に可能なのか」と言われたら…。

**吉成委員：**

だけど、当事者にしてみれば、教育委員会にいきなり持っていけない。それから児童相談所に行くのも嫌。そうなったときに、やっぱり敷居が低い所じゃないと、入り口としての相談もできない。

**森委員：**

そうですね。だから、「本人が」というレベルの話と、「そういう枠組みをちゃんと作りましよう」という話は、分けなければいけないと思う。

**吉成委員：**

そういうことですね。どういう体制化が必要かということになる。

**森委員：**

本人たちには来てほしい。一番、ハードルが低い施設でありたいし、実際そうだし、そうでなければならぬと思う。

しかし、本当に「そういう位置づけになります」と、我々が言えるのか、言える状態というのはどういう状態なのか、どこまでちゃんとバックアップも含めて体制が組めていたら、それが言えるのかということ、冷静に考えないといけないと思う。とてもいいことだと思うので、私は賛同するが、それを書くのであれば、やはりそのために、もうひとつ書かなければいけないことがある。

例えば子育て支援のところは事例が出ていたが、もし、こういう役割を担うのであれば、その専門と、ちゃんと連携していること。その『連携』というのは言葉の連携ではなく、体制まで含めてできていること。それが条件としてあるのなら、いろいろな所で、いろいろな層で、そういうタイアップをしていって、図書館はまずファーストステップというか、最初に行ってみようと思える場になるというのはとても素敵だし、私もそうありたいと思っている。

そういうシビアな部分を含んでいるということを前提として、つい最近そういう話をしたので、紹介させていただいた。

**伊東委員長：**

そうした事例は、たくさん出し得ると思う。事例をいくつか挙げないと、読んでくれる方に「地域の課題解決」と言っても、なんというか、「実用書、読めば？」と言っているようにしか聞こえないのではないかと感じるがあるので、そこを書き込む必要はあるだろうと思う。

やはり現場の人は、その現場のことを前提に考えるので、そこから離れられない。それをなしにして、「いや、そうじゃなくて、みんながいつでも来られる広い所を作ろうよ」というようなことは発想に生まれてこないが、少しそういうような、具体的な話を挙げる必要があるだろうと思う。細かいことと、それから理論的な大きな、今言ってくださったような部分の両方を書き込む必要があるだろうという気がしている。難しさは、私も感じているが、先ほど森田委員が言われた、書かれている課題に対して、その先に解決のストーリーがきちんと書かれているといことは大事だと思う。

**森田委員：**

課題を市民に向けて問いかけの形でできれば、この5つの課題があるだけで、すごく、「図書館を変えようっていう、変わろう、変わるんだ」という期待や応援になると思う。例えば、「図書館に来ない人をどう呼ぶか」は、問いかけの形で文章を止めてしまうのはどうか。

図書館サービスをどう周知するか、分かってもらえるか、豊富な蔵書をどう見せるのか、市民のニーズをどう知るのかとか把握するか、利用しやすく居心地の良い場をどう作り得るか、これを全部解決したらもう、「すごくいい図書館になる！」と思える。あとは付録でいい。「例えばこんなことがある、あんなことがある」と、バンバンバン書いて、「これを目指します」って言えばいいのではないかな。

**吉成委員：**

そうだね。

**森田委員：**

これで全部言い切っているような気がする。

**伊東委員長：**

逆に言うと、「目指したい将来像」以降が、これからもう少し重厚に書かれれば、ここの課題を書き直さなければならなくいけなくなるかも知れない。

「本当にこれが課題なのか」というところまで掘り下げきって、この言葉が出ているかどうか。

**森田委員：**

もちろんそうですね。そこはもうちょっと。

**伊東委員長：**

もうちょっと掘り下げて「この課題はなんのこと言っているのか」という検討が必要になるだろう。例えば、「複雑化多様化する市民ニーズの把握と的確な対応」は、どこにでもあるフレーズっぽく見える。これをこの松本市図書館が言っているのであれば、把握できていないということになる。できていなければ対応もできるはずがない。と、すると「書けないじゃん」という話に

なっていくのか、それともこれは、あくまで文言の話で終わってしまっているのかというところが、試されるのは後段だろう。これに対してどう答えて書いていくのかことにやっぱりなるのだろうという風なことは思った。

**森田委員：**

今までの議事録的な物の中からハッと思ったような言葉を紹介するようなのをやってもいいのかな、とは思う。

こういう風に文字にしてしまうと、お役所文書になってしまうのは仕方がないが、議事録から抜粋したというのであれば、別にトリートメントしなくても書けると思うので、引用してしまってもいいのではないかと思う。

**伊東委員長：**

前回だったか、僕が議事録読んで、「みなさん、いいこと言ってますよね」っていうことを言ったが、そういうところですね。「森田さん、いいこと言ってるじゃん」とか、そういうところを使えるのかも知れないということですよ、今の森田委員のお話は。

**森田委員：**

そうですね。

**伊東委員長：**

報告書のこういう行政文書にしてしまうと、ちょっと照れくさい言葉になってしまうと思うが、森田委員の『御用聞き』という言葉がどこかにそのまま使われているのは、それこそ発言のなかで「こういうのを『御用聞き』としてやってるんだよ」という話で、むしろリアルかもしれない。

そうじゃない人が突然、あそこに『御用聞き』って書いてあると、「なんだ？ なんなんだろう」と、ちょっと関心を引く感じがあるかもしれないなと思いつつ見ましたけど。表現方法というか、作り方として、それは考えてもらってもいいかも知れない。

**森田委員：**

こういうお役所的なものは一回まとめてしまって、それと別なモノが副読本として出てきて、「読まれる人はこっちをと…」。そしたら議事録ですか。

**森田委員：**

これを市長が読むとしても、最初のところで相当、「普通っぽいな」ってなりそう。『はじめに』から『図書館の現状』の真ん中くらいまで、なくてもいいと思う。

**森委員：**

『はじめに』というものの位置づけが、サマリーだったら結論まで書いているので、最初の数ページを読む価値が出てくるが、本当に「前提を述べます」の『はじめに』だと、森田委員が言われたように、「核心が始まるのは何ページ目からですか？」と、なかなか核心に到達しないと、読まれなくなるというところはあると思う。そうは言っても、これが課題だと認識するための前提を最初に書かなければ課題も浮き彫りにできないというのであれば、これに加えて結論まで書いてあるサマリーが一枚入れればよいのではないか。

いいことがたくさん書かれていると思うが、例えば、4の(2)の見出しと内容の関連づけをもう一回関連づけした方がいいのかもしれない。いろいろなことが、いろいろな所に書かれている

ので、見出しと内容の調整が必要と思われるものがある。

「職員が目と耳を、そして体を地域に向けよう」というところは、すごくいいと思うが、「実際にそのために何をしますか？」という結論までいくのに大分たくさん読んでいって、最後に「自ら変革する意思を持った職員の育成」が出てくる。ここは、例えば、最後の結論をこの章の最初にバンと書くというのはどうだろうか。キーワードとしてはいいものが盛り込まれているので、構成をこうしていただけでずいぶん、印象が変わるのではないか。

後は…課題に戻るが、この5つの課題は、いろいろ分類すると、最初は来ない人へのアプローチ、で、2番目3番目は、あるんだけど知られてない話で、二つ目の方がサービスの周知の話で、三つ目の方が蔵書の、見える化。あるものの利用しやすさの話で、4番目は新しいものの開発。何が重要なのかの把握と、それに対してっていうことは、今ないものを把握して新たにやろうとしてるところですよ。それで最後は、それに伴う「居心地の良い施設や設備」だから、建物の話になるっていう…。もう少し意識的にこの、課題で述べていることが何なのかがはっきりクリアになると、その後でその解決策のストーリーがもう少し作りやすくなるんじゃないかなあっていう気がしますね。

多分、1番目の課題の解決策は、2番目、3番目の「あるんだけど、知られてないから来ない」、「そもそもニーズに合っていないから来ない」、「居心地が悪かったり遠かったりするから来ない」という全てに、かかってくる。この五つ並列の課題の中にもいろんな関係性があると思う。

「やってるんだけど、知られてない」とか、「そもそもできてない」とか、それぐらいの単純な言葉で、「じゃあ、どうする？」みたいな形で、短く書くのはどうか。

#### 伊東委員長：

課題の並びは問題だと思う。

将来像も三本立てにまとめてあるが、これも今の森委員の話と同じで、やはり、被るときには被る話があるので、三本立てという三本の矢がいいのか、ズバリ一本なのか、他のまとめかたはないのか、悩ましいところではある。

#### 森委員：

これは、いわゆるサービス。「蔵書、場、人、資料情報、場、空間」という風に置き換えられないだろうか。あの…図書館の三要素ですよ。

#### 森田委員：

将来像は全然、悪くない。しかし、「地域に役立つって、例えばどういうこと？」とか、「学んで、本質的にはなんなのか」、とか、「活動するということは生きること」とか、けっこう、具体的な話を語らないと分からなかったり、哲学的な解釈に行っちゃったりする言葉が満載なので、そこまで書こうとすると大変なのかなと思う。

「多様な『学ぶ』の場」というのが最後にあると思うが、それは本を読むことだけではない、ということなので、そこを展開していかないと分からないのだが、ここでは「多様な『学ぶ』」で終わってしまっている。だから、これを出すと、かなりボリュームの大きい報告書を書かざるを得なくなるので、辛いかなという気がする。

そうであるなら、伊東委員長が言われたように、この課題の5点が本当にうまく独立しているのかっていうことを見なければならぬが、かなり、イイ線いっていると思う。全部ここから、出発してみてもいいのかなとも思う。



先ほど吉成委員が言われたオープンさとかコモンさ、そこにオフィシャルが加わると、齋藤純一さんが言われている『公共性』になるが、オープンもコモンも既に図書館は持っている。ただ、仕組みとして『コモン』なだけで、本当に多くの人に来て共有し合っているのかということ、そうではなかったり、誰もが入って来られるオープンさがあっても、なんだか入りづらいというイメージがある。

公立であれば、オフィシャルだということの問題ないのだが、「オープンってなんだろう？ コモンってなんだろう？」ということをもう一回、確認してみるというようなことも必要になるだろう。

だから、将来像の3点は、「真面目に書くと大変だぞ、これ…」という気がしている。

**吉成委員：**

そう思う。

**森田委員：**

要素は全部使えると思うので、最初の『課題』ね。

**伊東委員長：**

1回目のときに「松本市の図書館のみなさん、どう考えてるの？」ということがあった。その話が広がると、時間がないし、収集がつかなくなる気もして、どちらかといえば抑え気味にしていたところもあるが、結局、最後はそこしかないのだろう。

要は松本の図書館が、「何やる気あるの？」ということさえはっきり見えてくれば、逆に委員のみなさんは、「いやいや、そんな程度じゃなくてもっとやってよ！」というような意見があれば、もっと違うステージに上がれるようなことを書けばいい。

地域課題が云々というようなことは、あまりできていないものに分類されているが、現実的にできていないものはやはり書けない。それでもそこをサービス計画では書くぞという意思があるのなら、それを書くための前振りを書き込んでしまっているのではないかという気はする。

**森委員：**

改めてMTDの通信の2号を見ていると、これを報告書の見出しにしてもいいのではないかとと思うくらいだ。要素が全部揃っていないかたはするかもしれないが、報告書で言っていることを端的に言うと、「これからの図書館ってどんな場所？」に「こうだよ」と。例えば、「市民の日常の中にある図書館サービスだから学都だよ」と言いたいからこうする、というようにすごくいいのではないか。問いから始まって、「こうだよ」という答えがあるので。

やはり、短く書いているだけに、すごくインパクトがあるな、と思う。

例えば、「これからの図書館ってどんな場所？」で、図書館が今ある資料を使って、どこどう組んだら市民にアプローチできるのか、という話とか、今あるサービスでまだまだ使われていない部分を使われるようにするという話を一つひとつ照らし合わせると、「そういうことだよ」というものになっていると思う。それを報告書でも際立つような構成にしていけばアピールできるものになると思う。

森田委員が言われた「キーワードを抽出して…」というようなことになるだろうか。

森田委員：

「何か起こってるぞ、これ」というか、「何か始まるぞ」というようなことをみんなに伝えるっていうのが、一番かなと思っている。そういう意味で、素々案を見ると、なんだか今までどおりなイメージで始まるので、そこからぶっ壊しちゃえばいいと思う。

森委員：

そうですね。

森田委員：

この委員会のゴールは、機運を高めるということだった。それが2回目の会議で確信になっている。機運を高めるためには、やはり、何かこう、新しいことが起こるとか…。

『本は自分で探すもの』と思う人は少なくともありません。」と書いてあるが、ディスカバリーというか、発見するというのはすごく楽しいことだから、それをいかに発見してもらうか。手を出してはいけないはずだと思う。

多分、そういう意図で書いてはいないと思うが、こう書いてしまうと、「お探ししてあげます」というサービスがあると書かれているようで、それは違うと思う。

何が図書館としてやっていいことなのか、どこまでやるべきなのか、そういうことを、ちゃんと考えていきます、というような。「新たなサービスを考えていきます」と言ったときには、別に一個一個書いていく必要はなく、今まで常識と思っていたことをもう一回考え直していくという感じになる。

「知は現場にある」という話をしたが、図書館が知の拠点なんておこがましいと思う。

吉成委員：

うん…。

森田委員：

そういう、「変えていきます」「どんどんやっていきます」という宣言して、それで終わればいいのではないだろうか。

やって間違えたら、直せばいい。「あ、これ違うな」と思ったら、軌道修正する。そういう風にしていきます、というようなことを、「やろう、やろう！」って「みんなで言い合いました」という報告書にする。

森委員：

そうすると、主語は、誰で書くのかという話とも繋がってくると思う。

森田委員：

それはもう、行きがかり上、『チーム』です。

森委員：

そうすると、「松本市図書館に期待する将来像」の、期待しているのは誰？ とか、「目指したい将来像とは」のところの、「図書館は、……提供することができます」「地方公共団体等々は、……活性化を図ることができます」の辺りは、「図書館は本来こういうものです。だから地方公共団体も図書館を活用しましょう」と、「個人だけでなく、組織も図書館を活用したらいいんじゃない？」というようなことを言っているのだろうか。

だから、主語は誰かという話がすごく大事。常に、我々チームが主語だから、「使って」なのか。ここは「地方公共団体は何々しなければならない」的な法律っぽい言い回しかなと思った。意図するのは、「私たちはこうだったけど、こうすることにしたからみんな一緒にやりましょう」という、決意表明的な報告書にしたいということではないだろうか。

**伊東委員長：**

主語の話は、素々案に「目指します」と書いてあるが、委員会はそれを目指せないで、その問題。

「外部のみなさんが議論して、出してくれたものを市がどう受け止めるか」と思って読んでもらえるのか、「図書館の人も絡んで書いてるぞ」って風に思われて読まれるのかというのは、内部的には大分違うので、それをはっきりしておかないと書き方が違ってくる。

図書館と委員会は運命共同体というか、同じところを目指しているのは当然だが、僕らの役割としては図書館外の人に動いてほしいという具体的な目標があるので、そのためには、館長すら「えっ〜?!」と言うようなことを提案してしまうということも、場合によってはあっているのではないかとおもっている。

**森委員：**

「期待する」と言っているのは委員会で、図書館側は期待される側で、外からの力を使って、中を変えたり外に訴えたりするってことだろうか。

**伊東委員長：**

その辺をどういう風にするは、僕もしっかりイメージできていないが、図書館が事務局だから、全く知らずに作られたわけではないということにはなると思う。

**森田委員：**

A4一枚、僕らひとりずつ書きますか。

**吉成委員：**

結局そうなるのね。

**森田委員：**

「こうするの、いいんじゃない？」っていうのをA4一枚、書いて、それに対して、その対策というか、「こういう形でがんばります」って、図書館の人に書いてもらうというものではどうか。

**吉成委員：**

うん。

**伊東委員長：**

その辺りのことも考えていたことではあって、「良かった。言ってもらえて」と思って聞いたが…。ただ、この段階で何ができるのか、スケジュール的な問題も睨んでかなければならないので。

**森田委員：**

吉成委員も先ほど、第5回というタイミングを考えながら、お話しされたが、「図書館は文化的救済病院」の話とか、「図書館に来る人が、話がしたい、受け止めて欲しいと望んでいる」という

話を報告書のどこかに埋めろと言っても、埋めにくいと思う。

**森委員：**

コラムとしていただけますか？

**吉成委員：**

合わないでしょうね、多分。はじめの「役割とは」というところから出だしが違うので、そこを合わせるのは難しい。

**森田委員：**

せっかく、これだけネタというかが、あるので、これを有効に生かしたいとしたら、その、「こうあってほしい」という私たちの願いというか、取り上げたことを使って、「こういう風にしていきます」と。

**吉成委員：**

例えば、『図書館の役割とは』っていうところが、図書館サイドの中だけで見ているのか、もうちょっと広いところから役割を見ようとするかによって全く書き方が変わるので、何を採用するかは別として、これはそれぞれ書いた方がいいと思う。それをどう採用するかは、事務局判断になるのか、伊東委員長なのか分からないが、それは必要だと思う。前提だから。

その先の課題の5つは、それぞれの持ち分とかの得意不得意もあるから、これはもう、箇条書きで出していてもいい。「こういう課題に答えるためにこういうような方向があるんじゃないか」というのは、それぞれに出せるかもしれない。

**森委員：**

これまでの議論のなかで、強みとして「豊富な資料費がある」ということは、「それを有効活用して、ニーズに沿った豊富な資料が揃い提供できるから強みなんです」と何回か言ったと思う。それは裏返すと、『御用聞き』をしないとニーズは把握できないのに、資料費を正しく執行する業務量が多くて、『御用聞き』に行く時間がない、というような足かせにもなっているということ。

そうであるならば、新しい選書のあり方、この豊富な資料費を市民のみなさんに有効活用してもらうために、選書のあり方そのものを変えて、市民団体などいろいろなところが、「私たちの課題解決をするために必要な資料はこれです」というのを受け入れるということになれば、本当に課題解決に資する資料コレクションができますね、くらいのことを考えたいわけです。

先ほどの吉成委員とも同じだが、「こうであってほしい」という委員の思いをどう報告書にまで落とし込んでもらえるのかどうかを考えると、文脈に沿わなければ「コラム」になるのだろうかとも思っている。

**伊東委員長：**

コラムもありかもしれないな。

**森委員：**

例えば『先行事例』の枠を作ってもらっているが、いい面と、実はどうなんだろうって両面あるような気がしている。その土地だからこそ生きているやり方を松本に移植しても機能しないかもしれない。「この自治体はこうだったから、こうやって良くなった」という、背景的なところとも凄く結びついているので。松本市のストーリーが必要だと思う。

**伊東委員長：**

僕が思っていた事例は、例えば、地域課題、例えばビジネス支援で、図書館の情報で企業を起すという、10年前は「嘘だろ」って事例が、今、どんどん出ている。

そういうことをピンと来ていない人に読んでもらうわけだから、図書館の具体例として、「こんな事例がもう発生しているんですよ」「ただの文言じゃないんですよ」というところは、具体的な話で書かないと分かりにくいかなという感じではある。

**森委員：**

あ、それはそうですよね。

**伊東委員長：**

森委員の話を聞いていたら、吉成委員の「図書館の役割」ってそもそものところだけど、「図書館の役割って、図書館のあり方だね」って今、思ってしまった…。

**吉成委員：**

そうですよね。そうそう。

**伊東委員長：**

課題をはっきりさせないと、その解決が出てこないの、『課題』がくるのはいいと思うが、「図書館の役割」と「松本市図書館が抱える課題」は、ボリュームを下げてもいいかもしれないし、扱い方が合っていないのかもしれない。

図書館法がどうか、あり方の望ましい基準がなんとかってという入り方は、図書館人が読むならなるほどと思うが、そうでない人は「見たことがない法律を挙げられても…」となるだろう。菊地委員あたりには、こういうの始まり方はずまらないのではないかと思う。

**菊地委員：**

まあ、必要だろうなって…。

**伊東委員長：**

そう思うだけで。

**菊地委員：**

そうそう。必要だからここあるけど、はやく「めざしたい将来像」に進みたいな…って、読み方はしてしまう。主語が我々の報告書なので、我々が一言一句書くべきものを代筆していただいているという認識でよいか。つまりこれ、僕たちの報告書なんですね？

**伊東委員長：**

形としてはそういうこと。

**菊地委員：**

図書館が僕たちの議論を踏まえて市に対して出す報告書ではなく、委員会が市に対して出す報告書ってことということであれば、僕らが書いた方がいい。

次回が最後なら、「確認して、以上」ということにしたいところ。

**伊東委員長：**

本来はそう。

**菊地委員：**

今、状況を整理させていただいていたが、僕の頭の中で状況を踏まえ、残された時間等も加味しつつ、この報告書の役割を改めて思うと、森田委員がさっき確認してくださった、「機運を高める」という役割をこの報告書が果たしてくれれば、委員会の立場としては、それでいいと思う。これまでの4回の僕たちがやってきたことは、「結局、図書館は何がやりたいの?」ということを引き出していたというところがある。僕たちが「こういう図書館がいい」と勝手に言いながらも、結局、「松本市図書館、何がやりたいんですか?」ということを引き出していたと思う。

つまり、僕らはコンサル的なことを結果的にやっていて、それを受けて、松本市図書館としては、「こういうことがやりたい」という基本サービスの方向性とか方針の輪郭が徐々に明らかになってきている。要は僕らが「こういう図書館がいいんじゃないか」と言っていることと、「やりたい」と言っていることの像というものが具体的に一致し始めているというのが、前回であったり、前々回であったりということだと思っている。

何が言いたいのかというと、つまり、この形式で多分大丈夫だということ。『図書館像』というものはそこまで乖離していないはずなので、基本的にはこのまま進めていいのではないかと思っている。

機運を高めるという役割を果たす報告書になるように、構成や文言を、協力して見ていくということに、残された今日と次回の時間を使えばいいと思う。

**伊東委員長：**

最後は文言のところまで検討しなければならないが、気になっているのは、先ほど森委員が「目次をやっぱり私はやる」って言ったあたりのこと。どうしても全体構成が、毎回、問題になるので、そこを決めていく必要がある。

前回、菊地委員に整理してもらって、大分すっきりしてるはずだが、やはりこの問題が出てきてしまうので、それさえ固まれば、そこ引き出しをつけていだけなので、やりやすいのかなという気はする。

それを森委員、出してみませんか?

**森委員：**

了解です。はい、やってみます。

**伊東委員長：**

それでは一旦休憩をはさみ、10分後に再開します。

===== 休憩 =====

**菊地委員：**

会議の再開前に2点、報告したい。

ひとつは、芸術館との『御用聞き』が少し進んだということ。

瀧澤館長に芸術館へ来ていただいて、僕も立ち会いながら館内を回り、「ここにこんな本があったら楽しいよね」というような話をしながら芸術館側の担当の水戸さん、瀧澤館長、僕の三人で、屋上に上がったりしながら現地を見てきた。その後、17日に水戸さんが中央図書館の団体貸出の図書の中から、お互いに選びながら、置く本と置く場所を選びながら借りていったとのこと、実際に動きが始まったということ。

**事務局：**

棚を作ると言っていました。

**菊地委員：**

あとは芸術館でがんばるということですね。

**事務局：**

そのほかに図書館では使わない寄贈本やリサイクル本も、何冊かピックアップして持っていかれました。

**菊地委員：**

では、それは、芸術館の方のメディアでもある『幕が上がる』とか、そういう方でも何かしらトピックスとして紹介できたらいいかなと思っています。

MTD。通信がまち場の人目に留まることも大切だと思うし、他のメディアでも、せっかくコラボレーションするのなら、相手のメディアでも「こういうことを図書館でやりました」っていうことを発信できるかと思う。幸い、僕、向こうのメディアにも関わっているので、それはやりたいと思っている。

2点目は2030年基本構想のこと。

既にお話しているが、僕は松本市の2030年基本構想というものを考える市民会議に委員の一人として参加している。

先月末に市民会議が提出した『松本市基本構想2030の素々案』を市民に対して発表するという体裁で、市民フォーラム主催の発表があり、その後のフィードバックを経て担当部署で練り直したものを素案として2月議会に提出することになっている。

素案のキャッチフレーズは「豊かさと幸せに挑み続ける三ガク都」。基本理念は「三ガク都に象徴される松本らしさをシンカする」。「市民及び行政の行動指針」というタイトルのなかで何を行動指針にするのかというのが五つの動詞『みとめる・まなぶ・いかす・つなぐ・いどむ』で表現されている。

この『まなぶ』は、より具体的には「共にはぐくみ学ぶ」という表現になっており、僕はこれを単純な学習というよりは学び合いや生涯学習というようなことを意識したフレーズになっていると理解している。

先ほど森委員が言われた「松本のストーリー」というようなところの、ひとつの補助線として、基本構想の中ではガク都…学ぶ都の意味での学都であったりとか、市民と行政に望む行動指針として「学ぶ」が入ってくるこの先10年になるっていうことを共有しておこうと思う。

**伊東委員長：**

それは大事なことで、そうすると「学ぶ」というフレーズを積極的に入れることを考えないといけない。

**森委員：**

基本構想のなかの「共にはぐくみ学ぶ」というフレーズを報告書のタイトルにしてしまってもいいくらい。「それを支えるんですよ、図書館が」ということで。

**吉成委員：**

うん…うん。なるほど。

伊東委員長：

では、後半、何かしら方向を出したいと思う。

無理な願いをしたら、休憩なしでやってくださったことの報告を先ずお願いしてよろしいでしょうか。

森委員：

最初に要旨。ここにはごく簡単な経緯と結論を書いてポンチ絵を入れる。そのポンチ絵に目指す方向性を示して、報告書を読む方に「要点」がここで分かるようにする。以降は、ここで使った構成を繰り返す。章によって事項が変わってしまうと、「どうつながってるんだっけ？」ということになるので。

次に『松本市図書館が目指す将来像』で、最初から方向性に入る。最初の要旨は主語が委員会でもいいが、本論へ入ると、主語は委員会なのか、それとも図書館がいいのか……。『図書館はこれからこうなります』という宣言であるならば、図書館が主語の方がいいのかもしれないと、まだ、迷っている。

「全ての松本市民に活用される図書館になる」「学都松本に相応しい図書館になります」というのは、一番大切な、言うべきこと。今あるサービスや資料も知ってもらわなければいけないし、足りないものがあるなら、それを補っていくということを使う。そして、「それはどんな施設や設備や場所なんですか？」というようにつながっていく。『資料・情報、人、建物』の三要素は、図書館の要素として常にあると思う。それを使うというのが、この後の章も統一できるやりやすい方法なのかもしれないと思っている。

ただ、ここはこれまでこの委員会で話し合ってきた特色、「こういうところにすごく力を入れて話し合ってきたよね」「そこに思いが強いよね」というものがあれば、それに合わせればいいのではないかと思う。

次に目指すべき方向性があるって、それを実現するための手段の話が出てくる。目的があって、手段があるというのは、前回、菊地委員がピラミッドで書かれたのと同じ。目指す方向性があるって、「どうすれば実現できますか？」という構造になっている。そのためには、「こういう職員がいることで、こういう運営体制があることで実現できる」「こういう施設・設備が必要である」というような話につなげる。

最後に、参考として、図書館の役割。「そもそも法律や基準、提言ではこう言っている」というものを示して、「松本市の図書館はこういう現状なんですよ」というのは後から見ればいいのかと思う。

法律上の規定や、文科省、総務省、内閣府が言ってることや制度上のあるべき姿的なことを把握したい人のためには、しっかりと網羅的に、「図書館に関わる提言にはこういうものがある、そこでこう述べられている」というのを付録的に整えた方がいいと思う。それを松本が満たしているかどうか。市を運営する立場の市長をはじめとする人たち、さまざまな部署にいる人たちが「この基準をクリアできていない松本は、それでいいのか」と思ってもらえるものを列挙したうえで、「課題はこうだ」と示す。

統計的なものは付録としてあればいいと思う。後ろの方に付録がしっかりついていれば、前の方で適宜、そこから引用する、というような構成にすることで、頭でっかちにならずに核心から入ることができると思う。

「夢物語を言っているのではなく、現状認識をしっかりしているのだ」ということを言うため



に後ろの方にはきちんとしたものを載せる必要があると思った。材料はかなりそろってきているので、構成を考えてもらえれば、そういう風になるのではないかと思う。

**伊東委員長：**

どうでしょう。見ていただいた感じとご意見を。

**菊地委員：**

僕は元々『図書館の役割』、『現状や課題』はいいから『めざしたい将来像』を早く読みたいと感じていたので、この構成ですっきりすると思う。素々案で、常套句的な『はじめに』とか、法律的、一般的に言われている「図書館の役割とは」というような話と、現状認識、課題把握に関しては、「そこはまず分かるから何がやりたいか教えてほしい」という感覚があるので、しかもそれが最初のエグゼクティブサマリーというところで、全体像を見せたいというように繰り返すような論調もいいと思う。つまりこれは、ポンチ絵が目次を兼ねる感じになっていて、実質的なものは「将来像・方向性」、「将来像を実現するために」で語る、という流れ。

付録として法律的な話であったりとか、現状・課題といったところが添えられるというのも、僕はすごくいいと思っている。

この素々案の2の「図書館が抱える課題とは」というところの(1)現状、(2)課題というのは、事前に図書館の方で実施された利用実績調査や利用者アンケートを分析した見えてきた数量的な調査の結果として出てきた課題。それを一つひとつ解消していった先に、目指したい図書館像があるのかというと、それだけが全てではなく、どちらかというと、「目指したい図書館像があって、それを実現していこうとすると、結果として事前に把握していた現状及び課題が解消される」という方が、今回の報告書の宣言というか、伝えるべきことなのではないかと思う。

そう考えると、巻末にアンケート等で把握した現状及び課題が書かれることは、欠かせないことになる。森委員が言われたとおり、そこから適宜、手前の部分へ「参照」として引用しながら、今、画面に映っている、『将来像を実現するために』のクロポツの『サービスのあり方』のところに、「こういうサービスがあったら良いと思う、こういうサービスのあり方が望ましいと思う」ということが書かれ、そこに対して「このサービスがあると、付録に書かかれている課題、松本市の図書館が抱えている現状と課題の〇何番が解消されると考える」というようなことを添えていくという構成なのかなと思った。

**森委員：**

どこまで堅く書くのかは置いておいても、「こういう構成にしたら、どういう読み方ができるか」というところでは、今、菊地委員が言われたことが、私のイメージしているもの。それがいいのかなのかということだが…。

もうひとつ改めて思ったのは、利用実績の推移とか利用者アンケートの結果から起こした課題は、確かに現状打破に直接結びつくものもあるが、全てではないだろうということ。目指す姿との間には、まだギャップがあるだろうという気はする。その『ギャップ』のなかには、先ほど吉成委員が言われたような、「アンケートや利用統計からは見えないが、目指すべき方向性はこうなのだろう」ということが含まれると思う。課題は分析結果から言えることだけではないかもしれない。

ないものだけを書くと、あるのに知られていない部分が欠け落ちてしまうので、あるものも書いておいた方がいいだろうと思う。「こういうサービスがあるけれど、一部の人にしか知られて

いない」という書き方はした方がいいのかもしれない。それから「そもそもやっていない」という話になって、さらに「本当に、全ての市民に…あらゆる世代のあらゆる市民に資する図書館であるためには、こういうことを新たにしていかななくては、そこには到達できない」と。

**伊東委員長：**

森田委員、いかがですか。

**森田委員：**

もし、これを自分で書かなきゃいけないのなら、「どこまで書いたらいいんだろう」と、悩んでいる。

自分自身も何年後にオープンするというものを手掛けているが、やはり図書館像は人それぞれなので、『目指す将来像』を僕が書こうとすると、みなさんのイメージと相当違ってしまう可能性もある。それでもこの構成には大賛成だと思っている。

しかし、これを委員会の主語で書くということになったときに、揃うのだろうか？

**伊東委員長：**

そこでバランスを取ると、ほわほわしたものになっていくので、個別の委員の意見的なものをズバリ載せるというのも手と言え手だと思う。

意見の違いはあって当たり前なので、最終的には、それを踏まえたうえで許容できる範囲の報告書にできるかどうかというところだと思っていた。

**森委員：**

主語の問題に戻ると、委員の立場で好きなことを自由に言っていただいて、そのなかで受け止められたことについて、「私たちはこうありたい」と思ったことを図書館が主語になって書いた方がいいと思う。

この報告書自体が外からの追い風なので、「もし、それがなければ、ここまで書けなかった」というものを書いてほしい。図書館の中だけでは書けないところまで、外の声を取り入れて、「ここまで仕上げてきたよ」と。「今の私たちとギャップはあるけど、目指したいところはここなんだよ」というものに。そうすれば、それが拠り所になってサービス計画にもなるし、闘うときの材料にもなる。でも、それを「委員会の人たちが書きました」ということだと…。予定調和的になりたくないですよ？ こういうメンバーを選んだ時点でもしかしたらそうかも知れない。「こういうメンバー」って、いい意味で言ってますが…。

**森田委員：**

応援をすごくしたいし、するつもりで来ている。だけどここで、例えば「武蔵野プレイスみたいな支援フロアみたいなものをやる方がいいよ」というようなことは言えないので、それを将来像として書いてしまうわけにいかない。

**吉成委員：**

うん。

**森委員：**

「大胆に書いていい」ということだったので、森田委員が最初に言われたように『『ザ・図書館』の場じゃないよ』、とか、吉成委員も言われていた「もっと大きな役割があるよね」というお話が

報告として書かれていいのではないか。それぞれの委員から出てきたものの一番大事なところをちゃんと残すとすれば、書かないわけにはいかない。

**森田委員：**

例えば、「学びというものは、新しい関係性を築いたときに、学びが必要だということが感じられる」と、僕が発言したことが取り入れられないと、「学びって、いつ起こるのか」というようなことが、報告書に書かれないままになる。そうすると僕は「新しい関係性を築く場が必要なんだ」「そういう場に図書館はなるんだ」ということを多分書くというようなこと。僕が書くとしたらもっといろんなことを書くので、もう委員会ではなくなってしまう。だから、違うのかなあとも思う。

**伊東委員長：**

森田委員の言う、「言ったことをきちんと載せる」というのを、文字通りに載せなくてもいいけれど、「ここは載せたい」というものはあるだろう。僕はそれを載せていいと思っている。まず、森委員の提示してくれた目次への素々案の入れ替え。これの埋め替えの中で、「あれも必要だぞ」というものをしっかり埋め込んでいく。

**森委員：**

森田委員が提案された、A4一枚書くというものなら、やってもいいと思っていますか？

**森田委員：**

そうですね。

**森委員：**

目次を示して、主語がどちらなのかということが際立ってきたが、それでもA4一枚の執筆はしていただけるということですか？

**森田委員：**

まず1点目の方向性とか、目指す方向性をそれぞれ5人が「委員会を経てこう思った」という思いを書いて、それに対して図書館としてできることとか、「できない可能性もあるけども…」というような話を書くというようなことで。

**森委員：**

それは今までの議事録を読んだときのエッセンスが凝縮されたものが5枚出るということですね。

**森田委員：**

そうですね。

**森委員：**

大きな章の部分を、前提の部分を後ろに持っていつているだけ。それだけで大分、読みやすさが変わるのではないかということだけなので、これに組み替えてもらうのはテクニカルな作業の話。

森田委員：

もうちょっと言ってしまうと、『はじめに』や『図書館の将来像』を5人それぞれが書きますよ」というようなことだと思う。

吉成委員：

うん。

森委員：

そうするとボリュームがけっこう大きくなるので、それこそ冒頭に掲げた方がよくなるでしょうね。

森田委員：

「こうなるべき」と思っていることを…。

森委員：

第1章のところですか？ あれでいう…。

森田委員：

だから…『はじめに』？ 『はじめに』をどこに置くかってこと。ゼロはゼロであって。

伊東委員長：

ゼロが始めに？ あの役目をするのは、今の状態ではなく、『はじめに』でしっかり書き込めばいいだろうと僕は思っていたが、あれはそういうのとも違う？

森田委員：

サマリーということで。

森委員：

サマリーが本当に要約なので、『はじめに』的な内容から結論まで全部入っている。

伊東委員長：

論文的な抄録をそのまま言っているのか。

これは行政文書なので、文書のはじめに1章、2章というところで、それをはめ込もうとすると、『はじめに』がその役目を果たすのもいいのかな、と僕は思っていた。

森委員：

『はじめに』に端的に結論が入っているならそれでいいが、単に前提だけが書いてある『はじめに』は、読むのが面倒くさくなると思う。

伊東委員長：

具体的な章立てとして、これはゼロ章を作ろうとしている？

森委員：

ゼロ章です。

伊東委員長：

ゼロ章？ 本当のゼロ章…。

では、『はじめに』は、まだその前にあるのか。

**森委員：**

素々案の『はじめに』は、「法律でこう書いてある」というような内容だから、それは後ろでいいと思う。今の1章は、森田委員が言われている『はじめに』に近いかもしれない。「そもそも、あるべき論」を語っている部分なので。

**森田委員：**

そうそう、ゼロと1の間。

**伊東委員長：**

だから『はじめに』で、「こんな経緯で委員会ができたが、委員会としては議論の結果、こんなものを目指したいという風にまとまった」。そして、「興味あるなら後ろを読め」と、『はじめに』に書かれていればよいということになるのか。

**森委員：**

そうですね。

**伊東委員長：**

これの前にさらに『はじめに』を付けたくない？　なんて思うのだが…。

**森委員：**

今、伊東委員長が言われた内容が結論まで入っていれば、それがゼロになるのだと思う。しかし、「こういうような経緯で始めました。」というところで終わってしまうと結論がないので、読む方が「一体、いったいどこまで読めば具体的な内容になるのかしら？」という風になるのを避けたいということ。

**伊東委員長：**

『はじめに』で、「こういうみなさんに集まってもらいました。お疲れさまでした」って書いてあるというのがよくあるからね。

**森委員：**

「後に長い文章あるから読んでください」なんていう『はじめに』だったら嫌だな、と。

**伊東委員長：**

そうなるど誰も読まない。大体、『はじめに』も読まないんだから…

ボリュームの問題もあるが、あそこでいうところのゼロが、さらに小見出しをつけなきゃいけないような内容を考えているのではなく、ここの数行で、結論を書くということか。そして、それだけというわけにはいかないから、「委員会を作りました」と話と結論ぐらいを書くのか。

それくらいに『はじめに』をまとめてしまえば、いいのではないかというようなことですね。

**菊地委員：**

森田委員が言われるところの「ゼロと1の間」というのは？

**森田委員：**

とにかく行政資料だから、それはそうしなきゃいけないと思うが、まず「こんなこと言われま

した」というようなことを、ゼロと1の間に5人の…。

森委員：

それは1でよいのでは？

森田委員：

1でいいのか。1ですね。

行政資料の形のなかで、我々の思いを、我々を主語にして語るということを入れるべきではないかなという…。この委員会を何回かやってみた結果、こういう風な背景があることもよく分かったし、それで「こういうこと、やったらいかがですか？」というようなことをA4一枚ぐらいで書いて…。

森委員：

実は、この委員会の影響を私自身がもの凄く強く受けていて、今、県立図書館のミッション・ビジョンを並行して作っている。だから、『学ぶ』というのは「新しい関係性を作ることなんだ」と、私のなかでストーンと落ちている。「知は現場にある」ということを前提にして館のみんなと話し合っ、県立長野図書館の言葉に変換している。

だから、「これは委員会が主語です。」と言われても、私には違和感がない。そのとおりでなと思うので。それを松本らしさの文脈の中で、松本市図書館の言葉として表現してほしい。

森田委員：

それは「今やっているサービスのここを伸ばせばできる」みたいなことが2に…。

森委員：

2に手段として挙がってくる。

森田委員：

どういうサービスやっているのか、僕は全部を知らないで、「もうできているじゃないですか」というものもあるかもしれない。それをやはり、「僕じゃなくて今の現場の人たちに語ってもらっていいのかな」という話。

森委員：

そうですね。

伊東委員長：

その辺はサービス計画で具体的にしてもらおうところかな。

森田委員：

ああ、そうですね。

菊地委員：

その『自分たちのストーリーを踏まえたいうえでの言語化』というところは来年度の作業ですね。

森田委員：

それなら、2の話はいらないのでは？

**伊東委員長：**

だから1番のあそこは「？」で終わっているの、「問いかけを先ずして…」と、委員会のなかでよく出ていた話が「あ、あそこで行われているのかな」ということで。

2はその、そもそもどういう図書館にしてほしいという2個目のポツと、それから問いかけの三つの答えが2に来ると思う。ただし、個別のサービスを羅列することはできないので、そこはそんなにボリューム割くところではないだろうとは思っている。

**森委員：**

例えば、デジタルは目的ではないので、1に書くことではなく、それを実現するために、2で書くべきこと。そういう分類はあった方がいいような気がする。

目指すべき方向性や目的は1で書き、手段の話は2に書くという、ざっくりした分類は必要。デジタルのことをなんとなく1に書くと、デジタルが目的になってしまうので、そうではないということ。

**伊東委員長：**

確認ですが、森田委員の「書くよ」といつてくれているのは、書いたものをどこかにスコンと入れるということですか？ それともそれを汲んで、場合によっては2～3個あるものをどこかにはめ込んでもらう作業をして、ということなのか…。

**森田委員：**

僕は実務をやってきた人間なので、作業量がどれくらい大変なのかは分かる。そのまま載せていいのではないかとと思っている。

**伊東委員長：**

そのまま載せるイメージですか？

**森田委員：**

ええ。そのかわり、行政資料なので、載せる置き場を作ってもらわなければいけない。

**伊東委員長：**

そのまま載せるとなると、5個載せるイメージ？

**森田委員：**

そうです、そうです。

**伊東委員長：**

同じ所へ？

**森田委員：**

うん。

**菊地委員：**

それは「1」っていうところの話ですか？

**森田委員：**

うん。

森委員：

画期的ですね。分類毎ではなく、人毎というのは。

森田委員：

いやいや、そうですよ。

菊地委員：

僕はそういうことだろうかと、最初から思っていて…。

森田委員：

役割とか観点には、どれひとつとして序列はないですよ。みんな観点が違うから、みんな大事です。だから、並列で5つ載せるべき。並列ですよ。

伊東委員長：

そうすると、それを載せる場所って…。

菊地委員：

「1」なんだと思います。

森委員：

ある意味、繰り返しも起こりますよね。

森田委員：

起こります、起こります。重複もバンバン…。

森委員：

それを整理して、まとめて書く方がいいのではないか、という風に伊東委員長は仰っている？

菊地委員：

まとめた方がいいと委員長は思っている？

伊東委員長：

うん…。

森田委員：

それは後でまとめられればいいのか？

その、「繰り返し言われているこういうことがあるけども、それは大事です」と。

森委員：

ある意味、画期的な報告書に…。

森田委員：

ぼくは、あの、さっきに「オープン性」って言われて、「僕も書きたいなあ」と。吉成委員も書くし、僕も書くし、というように。

吉成委員：

そうだね。



森田委員：

それは大事なんですよ。

菊地委員：

多分、伊東委員長が懸念するのは、それが委員会の報告書として成立するのかっていうことですね。

森田委員：

そうそう、そう。

吉成委員：

うん。

菊地委員：

僕は森田委員の言いたいこともよく分かるし、つまりその、「この委員会の報告としては、5人5様の考えでした。」というのを五つ並べて出すが、でも、「5人5様と言いつつ、みんな共通してるじゃん」っていうのは、読めばもちろん分かる。つまり、こういうことが、この委員会が共通して思っていた図書館のあり方なんですよ」っていうところを汲み取って次年度の基本計画にそれを活かしていくという報告書なんです」っていうのは、それで僕も筋が通っていると思います。

ただ、委員会として5回話し合いをした、そのプロセスのなかで、抽出された委員会としての総意って何なんですかってところを、委員会として報告しているわけではないんです。

森田委員：

うん。

吉成委員：

うん。

森田委員：

それは第6回で書こう。ここへ。

森委員：

やっぱりそれはするんですね。

森田委員：

うん。それはもう、伊東委員長を中心に、その…みんなで書いた結果の、宣言文みたいなものを。

菊地委員：

それが作られるのであれば、それが1に書かれれば…。

森田委員：

第6回で何行か作ればいいのか？

森委員：

そう。それが1に入って、我々が個別に書いたのは付録になる。

菊地委員：

そう、付録。それでよかったら、それでいいと思う。

森委員：

それが落としどころなのでは？ 委員それぞれが書いたものが冒頭に並ぶのは、報告書として変…？

森田委員：

分かりました。そこに「付録を先ず読んで…」と書いたらどうか。(笑)

読み方として、「これが出てきた経緯はここです。」と。そうすれば、みんな見るじゃないですか。

森委員：

『報告書の読み方』というようなガイドが…。

菊地委員：

でも、その作業を次回できるのであれば、それでいいと思う。

森委員：

私もそう思う。

吉成委員：

うん。『宣言』というのがいい。短い言葉で集約できるかどうか分からないが、最終的には集約して宣言になると、言葉が残るので。

岩手県の増田知事の時代に指し示した、県全体の宣言は「がんばらない宣言」だった。

菊地委員：

ああ、ありましたね。

吉成委員：

ああできるかどうか、分からないが…。でも、あれは15年くらいたっても覚えている。

菊地委員：

僕は『宣言』と言い切ってしまうのはすごくいいと思う。それは、委員会が主語の報告書だからこそ、ステートメントとして発言できる場所があると思う。

吉成委員：

はい。いいと思います。

菊地委員：

この報告書は機運を高める効果的な外からの追い風として我々が主語でつくり、我々の『宣言』として出すのであれば、僕はそれがベストだと思う。

吉成委員：

そうだね。

菊地委員：

極論すると、森田委員が言われるとおり、あり方検討委員会の報告書としてはあり方を指し示

せばいいので、あり方を具現する2の『手段』というところは、僕もいないと思う。

いないのだが、その先に控えているサービス基本計画を考えると、この報告書のなかで具体的な手段として「委員会のなかでこういう話題も上がった」というところを書いておくことが布石になる。サービス基本計画を作るとき、「なんでサービス基本計画に、突然、このサービスが現れているの？」と言われずに済むための布石として「あり方検討委員会のなかで、具体的なサービスとして出たんですから」と言えるという意味では、2があることに意味はあると思う。

**森委員：**

2がないと、あるべき姿を実現する具体的な方策がないままに宣言だけすると、絵に描いた餅になる。どうすれば餅を食べられるのかという手段を、指針としてある程度、報告書に載せることで、次の本当に具体的な『サービス基本計画』につながると思う。そのつなぎとして『『より有効にこの目的を達成するための方法にはこういうものがある』、と、委員会から提言を受けています』ということはあった方がいいと思う。

**伊東委員長：**

具体的に来てほしい人は図書館に来ない人たちなので、「目指しているものは、あなたが思っている図書館じゃないよ」ということをきちんと語ってあげないと、やはりイメージできない。

「なんだか威勢のいい提言はきてるけど、具体的になんなのよ？」ということになる。だからこそ事例であったり、手段を言ってあげないと「え、図書館ってそうなの？」といことにはならないので、やはり「将来像を実現するために」の手段は必要だろうと思う。

では、館長さんに確認したい。主語の話でどうしても行ったり来たりしてしまうが、主語は委員会ということなのか。

**事務局：**

委員会をお願いします。

**伊東委員長：**

では、「私が書く」と、みなさんに思っていたいたので、松本ならできるだろうとか、無理だろうということではなく、『あり方』としてあるべきだろうというスタイルでいいと思う。それぞれ思うところの「こういうのもあるぞ」と。

だから前回、事例が何かないかと聞いたのは、僕も知っている範囲は狭いので、「あれもあるよ、これもあるよ」というものをいろいろ埋め込めれば、具体性が出てくると思っているから。それぞれが書いたものが出てきたら、委員同士の議論が生まれていいと思う。みなさんが「そこはちょっと違うな」と思うところは言ってほしい。

**森田委員：**

『宣言』をみんなで作ることにして、その後、それを見ながら書くか書かないか決めてもいいですよ。

**伊東委員長：**

その前に「宣言するの？」というのものもある。委員会が宣言するというのは、そぐわないような気がしているのだが…。

森委員：

ミッションですよ。

森田委員：

『宣言』を提案する。

伊東委員長：

なんていうのをするのかな、と…。知事なら「宣言」と言うのもイメージできるが…。

菊地委員：

姿勢として『宣言』ということ。

吉成委員：

そうだね。

伊東委員長：

『私たちの提案』か。提案して示すと。

吉成委員：

うん。

伊東委員長：

それは1のところに来る？ それともゼロ？

菊地委員：

1。もちろん、ゼロにも含まれるということになると思うが。

伊東委員長：

それはそうだね。

菊地委員：

言葉を尽くすのは1のなかで。

伊東委員長：

なるほど。

菊地委員：

見出しとしては、間違いなくゼロにも入ってくる。

伊東委員長：

…というような形で作ってみるという方向で、「一人ひとりが書いてください」ということになるので、1 ページ目安で、字数や行数は事務局から送られている文書に合わせて書いていただきたい。

事務局には趣旨を拾って、作って、それに沿った組み換えをしていただいて。

委員さんが書いてくれたのはもう、手を加えることはなしということで、載せますが、載せ場所としては参考資料の前になるのかな。

森委員：

あるいは1章の最後。

伊東委員長：

内容的には1章の内容になるものだね。

「こんなことしてほしい」という個別サービスにいてもいいが…。

森委員：

出てきたものを見てからでもいいかもしれない。

伊東委員長：

5者5様で。

菊地委員：

委員の5枚が1章の最後に入ると2章へ進むのに時間がかかる気がするので、あくまで資料として巻末、あるいは別紙という形でできないか。

森委員：

報告書はWEBで、ハイパーリンクで作りたい。紙も必要だが…。綴ったものだと、別建てのものを読んでもらえない可能性があるなので、セットの方がよいのでは？

菊地委員：

巻末の一部になるか。

森委員：

「参考」の前なのか、後なのかですね。では委員からの期限は…。

(以下、事務日程等の予測をしながら打ち合わせ。期限を1月19日とした)。

森田委員：

1の冒頭で「5人の『こうあるべき』を作るための目的で書かれたものです」というような、この文書はどういう目的で書かれたものを説明する一文を出してもらった方がよい。

森委員：

このような経緯で、こういう構成の報告書になったという流れは、議事録に残されると思うが、報告書本体に短く盛り込むというのはどうか。

伊東委員長：

多分、1の最初に何某か書いた部分の最後に「これを書くにあたって、それぞれがいろいろな見方、立場で意見を出し合って書いた。個々の委員が出したものは、〇〇にあるので、見てください」というように。

森田委員：

そうですね。それが一番いい。

この決め方自体も、非常にチャレンジしていると。「『そうだ、そうだ』とみんなでシャンシャンとやったわけじゃないよ」ということ。「こう書いとけば、間違いないよね」といって決めたわけじゃないから。

それぞれ5人の立場で書いて持ち寄ったと…。

**伊東委員長：**

場合によっては、「報告書本体ではないが、ある委員の意見がいいと思えば、積極的に取り入れてくれ」と、言っていると思う。

**森田委員：**

先ほど伊東委員長が言われた、事例をしっかりと書くと、部長なり読み手がイメージできるという話だが、事例を見に行ってもらわないと、分からないことがいっぱいある。雰囲気とか…『まち』になっている」というのは一体どういうことか、さっぱり分からない。それをどこまで、「行ってくれ」という書き方で書くか…。

**伊東委員長：**

この報告書は、事例集ではないので、どこかに事例が載るとしても、多くても半ページというイメージ。しかし、その半ページを書く労力は大変なもの。問い合わせたり、本来なら実際に見に行ったりと…、そういう労力をかけている時間はないので、「事例はもうキツイな」と言った。

それでも「夢物語を語っているのではないよ」という痕跡を残したいので、文章の中に、例えば前回言った、「医療サービスのことを積極的に、こんな形で提供している事例もある」というようなものを書きながら、先進的と言われる自治体の事例を章毎に、それぞれの項目に沿って三つ四つ並べておくというようなことはやってもいいのかなと思う。

「これをもっと詳しく知りたかったら都城市へ」というように…。

**森田委員：**

それは来年度ですね。

**森委員：**

この後、改修計画が立ち上がったなら、見学に行きたいですね。委員で。

**森田委員：**

ああ、どうぞ。

**森委員：**

将来的な話が出てきたので、少しお話したいことがある。

先日、県ヶ丘高校の探究的な授業で県立図書館へ来てもらった。『信州ナレッジスクエア』というデジタルアーカイブズも活用しながら、館で体験学習をした。そのとき、10人くらいが、自分の持っている課題意識を発表したが、一人が松本市立図書館のあり方についていろいろ話してくれた。

その時、担当の先生にMTDの通信をお見せして、「今まさに、こういう取り組みが起こっているから、閉じられた中だけでやるのではなく、具体的に話を進めていくときに高校生にも議論に入ってもらおうとか、そういうものになってほしいと思っているので、もし、良かったらコンタクトを取ってください」と言ってお渡しした。

これから報告書が出た後に、市民の機運をどう高めていくのか、この報告書がまず突破口になって、それをどう広げていくかというときに是非、未来の学び手、今まさに学び手としてやっている子どもたちの声を取り入れるというプロセスを是非、入れていただけるといいと思う。

**事務局：**

何年生ですか？

**森委員：**

1年生。「1年生でここまでやるか」って…。

**森田委員：**

貴重な人材じゃないですか。

**森委員：**

そう、本当に。せつかく関心を持っている子たちがいるから、是非、一緒にやっていただけるといいかなと思う。

本当に学都の象徴のような図書館だし、アンケートに「学都なのにこんな図書館？」と書いていたのも高校生だった。この世代は大事にした方がいいと思った。

**伊東委員長：**

私たちのこの時間が、火付けになればいいけど、火に風を送るのは職員のみなさんなので、すぐ酸欠になって消えないように、是非お願いしたい。

その意味でも、MTDの通信の活用とか…図書館って、カウンターに置いて終わることが多いので、是非、積極的に活用してほしいと思う。

では、次回への流れもできたので、締めにしていきたい。

みなさん、申し分けないですけど、それぞれ書いてみるということで。もちろん、時間の許す限りは書き直しもありなので、やりましょう。

いいですか？ じゃ、好きなこと書きますよ。

**事務局：**

お願いします。

**伊東委員長：**

では、これで終わりにします。ありがとうございました。

以上